

## 第1回感想文コンクール【優秀賞】 5作品

「厳冬期の富士山気象観測に挑む」を読んで

小学校6年生

日本のためにがんばった人、それは沢山いらっしゃいます。私はその中で、福岡の地元出身の野中夫妻の話を読みました。

明治時代の日本では、今のように気象観測が進んでいませんでした。特に気象については、先進国と大きな差がっていました。その先進国ですら不可能であるといわれた冬期の高山での気象観測に、野中夫妻は挑戦しました。

山頂での観測は大変厳しいものでした。すさまじい冷気のため凍りついてしまう計器に、熱湯をかけて二時間おきに観測しなければなりません。二人は凍傷や高山病にかかってしまい、命が危険な状態にまでおちいりますが、懸命に観測を続けました。

二人にとっての気象観測は、一体何だったのだろうかと思います。到にとってはたしかに気象観測は仕事でした。しかし、富士山での冬期での気象観測は、仕事では片づけられません。世界中のだれもやっていないことだからという名誉欲から？絶対にそんな事のために、命をかけるような事はできません。お国のために、この仕事ができるのは自分しかないという、強い使命感にもとづいているものだと思います。千代子にとっては、「尊敬し、信頼する到の切なる願い『志』にふれて、その人のために役に立ちたい。」その人のあとをついていきたいと思う気持ち、それだけだったと思います。

人の一生というのは様々です。もしかすると多くの方は、名誉が欲しい、お金が欲しいという自分のためだけに生きているのかもしれませんが、しかし、二人は純粋な使命感に燃えて、行動したのです。そのことが人々に感銘を与えたのだと思います。観測し始めてからは、千代子の存在がとても大きかったことと思います。困難をきわめる中、到一人だったらもしかしたら続けられなかったかもしれません。

私は、錬成会でドリアン神父様が教えて下さった言葉、「人間は支え合って生きている。」という言葉思い出しました。どんな不可能なことでも、挑んでいき、日本のために快挙をなしとげた野中夫妻。危険な状態になりながらも、日本のためを思って最後まで残ろうとした強さ。そして妻千代子さんと支え合いはげまし合ってがんばった二人に私はとてもひかれました。

私の名前は「縁」ゆかりと言います。私の両親は、「人と人との出会いを大切に生きて欲しい」と名づけてくれたそうです。人は支え合って生きているのだからこそ、自分もまた他のものを支えるために役に立つ存在であるような人生を送らなければならないと思いました。

## 「厳冬期の富士山気象観測に挑む」

小学校 6 年生

毎日あたり前の様に見ている天気予報ですが、そのかげには、若い夫妻の大変な苦勞があり、それによって日本の気象観測が大きく進歩したという事を、私はこの本を読んで初めて知りました。

明治時代、日本は天気予報の分野では世界からおくれをとっていました。そんな中、野中到は「出来る限り高い場所にて、長期間にわたって観測データを収集したい。そして世界にさきがけて正確な天気予報や台風予報を可能にしたい。」と考えていました。

我が国は四季があり、気象の変化が激しいので、作物を管理するにも漁をするにも気象は重要な条件であると思います。

正確な天気予報があれば沢山の米、野菜、果物といった作物の収穫が得られ、魚も安全に水あげ出来ます。そして何より、台風などの天災から生き物の命を守れるのです。それらの事を考えると私達が生活する上で、天気予報がいかに必要か、改めて分かりました。

到は明治 28 年 1 月に富士山への登頂を開始し、冬山のアイスバーンを登るために、登山靴に数本のクギを打ち込んでスパイクの様にしていたのですが、途中でクギが曲がってしまい、その時は断念しています。そして同年 9 月末に再度登頂したのです。

私は、到の志の強さにおどろきました。何故なら、登るだけでも困難な事が沢山ある上に、その後も危険な冬山で二時間おきに気象観測をしなければならなくなると、私だったら、「寒い、さみしい、死んでしまうかもしれない。」と、あきらめてしまうと思うからです。

到が登頂した後、妻の千代子が登って来ました。到には来てはいけないと言われていましたが、千代子は夫が山の上で病気にでもなれば目的を果たせなくなると思い、自分も登って手伝う事にしたのです。そして、今までだれも経験した事のない自然の厳しさの中で協力し、観測生活を送ったのです。

1 2 月、氷雪に閉ざされた中で凍傷や高山病になりながらも懸命に観測を続けていた二人は、救援隊によって無事救助されました。

私は、この物語を読んで野中夫妻の志である、利益や得のためでなく、社会や、だれかのために役に立ちたいと思う尊い心、実現に向かって努力する姿がすごいと思いました。

そして、二人が命がけで観測した事により、気象学が現在の様に発達したのだと思います。

「奉仕のころ」この言葉が、頭の中をかけめぐりました。戦いの時代、病院にはたくさんの方々が運びこまれます。敵や味方それぞれ同じ人間が傷つけ合ったため、命をおとす人々がたくさんいました。でも、息がまだ残っている人もいます。それを生きぬかせる手助けをするのが医者でした。

高松凌雲は「このたび収容した者は、たとえ敵でも傷ついた人々である。公平に治療にあたるのは当然のことである。」そう考えていたのです。

私は、今まで奉仕という活動は、お年よりにやさしくし、環境を大切に。それぐらいしか思っていなかったのです。でも本当は、心でした。「自分からする心」、「やさしさの心」、「勇気の心」。この心が奉仕なのです。奉仕の心を持てば、活動や体験それは自分の心を強くする事ができます。

ふと思ったのですが、この奉仕の心は私が大切にしている二つの言葉とつながっていました。「出会いは、自分から出る事」この言葉はまさに共通しています。「自分からする心」、「やさしさの心」、「勇気の心」この気持ちを出す事で、新しい出会いが待っているのです。これは、転校した時や初めての習い事の時の出会いと同じ事ではないでしょうか。

もう一つは、「迷った時は前に出る」こうする事で前に進むのです。奉仕の心に迷う気持ちは、少しはあると思います。そんな時この言葉を思い出すと、気合いが入り積極的に勇気を持てるような気がします。

凌雲の考えは、人々の心に伝わったようです。凌雲の奉仕の心は、昔も今も変わらないものです。その心を私達は受けついで行かなければなりません。そして、自分の心に目を向けてあやまちを気付いていかなければなりません。

医師、それは人の命を預かる大変責任の重い仕事です。それを進んで取り組み、人々を助け、奉仕の心を持っている凌雲はすばらしい人だと思います。自分は、医師と限らずに何か人の役に立つ仕事につき、凌雲のような生き方ができればいいなあと思いました。

私は歴史はなぜ学ばなければいけないのかと考えました。その結果、昔の人の衣食住を学ぶだけではなく、その時代の人々の考え方や生き方を学びいつもとちがう頭でいる事が大切だと考えました。

時代によって、人々は考え方がちがいます。なので時代の流れをとらえて次に活かすのが歴史ではないでしょうか。

凌雲の生き方を知り、奉仕の心と歴史の意味を自分なりに理解する事ができました。心に刻まれたたくさんの言葉。これから、いつもどこかでささやきながら私を支えてくれるでしょう。

「みずからが腸チフスに感染していたのです。」

この文は、腸チフスかん者の子を一人の看護婦が、自分の命を犠牲にしてまで救ったという意味です。

私はこの文を読んで、この看護婦のすばらしさに、とても感動しました。なぜなら、人の病気を一生けん命治す看護婦は、何度か聞いたことがあります。しかし、自分の命を犠牲にしてまで治す看護婦は、初めて聞いたからです。

この看護婦は、「福沢フミ」さんといい、日本赤十字社神奈川県支部所属の看護婦で、ポーランド孤児救援チームに参加していました。そこで、福沢さんは遠い国の見知らぬ子供を救うために、長い間その子供と一緒にいて、自分にその病気を感染させるという方法で、二人の子供を助きました。

なぜそこまでできるのか、私はそう思います。この生き方はとても立派だと思し、私もこんな事ができたら良いなと思います。しかし、ここまでできる正義感の強さを不思議に感じました。私だったら、治してあげたいとは、思います。しかし、自分の命までは犠牲にはできません。それなのになぜ、福沢さんはできたのでしょうか。それは、正義感が強く、思いやりがあり、そして何より、看護婦という自分の仕事に、誇りをもっていたからではないでしょうか。

このような福沢さんの頑張りや、他の看護婦の方々の頑張りのおかげで、日本は、ポーランドの孤児765人、全員を助けることができました。

私は、日本の看護婦が外国でこれほど活やくしていることに、おどろきました。私は、福沢さんのように、人の命とかまではいかないけれど、人の役に立てる人になりたいと思いました。そのために私は、三つのことを気を付けたいと思います。一つ目は、正義感をもつことです。自分にあたえられた役割を、最後までやり通すことができるようになりたいです。二つ目は、思いやりの心をもつことです。思いやりの心があれば、物事を相手の立場に立って考えることができ、次第に自分の役割を、見つけることができると思うからです。最後に、自分の仕事に誇りをもつことです。これら三つのことを、気を付けて、「福沢フミ」さんのようなすばらしい人になりたいと思います。

私が、この本を読んで強く心に残ったことは、この本にでてくるような日本人の考え方や、生き方です。だれかのために命がけで立ちむかう姿に、すごく感動し、私もそのような考え方や生き方ができる人になりたいな、と思いました。

中でも心をひかれたのが、第五話の、赤十字活動の先駆者と、第六話の、厳冬期の富士山気象観測に挑む、の話です。

第五話の、赤十字活動の先駆者を読んで、高松凌雲の「自己実現」という人生の送り方や、敵でも味方でも分けへだてなく人々のためにつくす奉仕の心には、すごいと思いました。また、このような考えがいかに大切か、と文章にも書いてあったように、自分だけ、じゃなく、他人のため、というような行動は大切だと思うし、だれかにやってもらうのではなく、自分で実現していけるようなことも大切なんだな、と思いました。

第六話の、厳冬期の富士山気象観測に挑むを読んで、だれもが実現していない課題に挑戦する野中到・千代子夫妻の姿や、千代子の夫を助けようとする姿、それにこたえる到の姿に感動したし、また、すばらしいと思いました。中でも、「なにもかもひとりでやっていて何か起こればすべてがだめになってしまう。」という部分や、「だれかのこころざしにふれて、その信頼する人のあとを追いたいと思う。」という部分で、協力とは、ただたんにいっしょにするというのではなく、こういうことなんだなあ、とか、何かをやりとげるためには、協力と強いこころざしが大切なのは、と思いました。また、「厳冬期気象観測の壮挙は千代子がいたからこそ実現したのだ」という部分で、私はその通りだと思ったし、何事も助けてくれたり、はげましてくれたりしてくれる人がいるからやりとげられるということをお忘れないようにしたいと思いました。

この本全体を通して、思いやりの心とは、どんなことなのか、私たちにどうやっていかに大切か、ということをお教えられたと思うし、また、日本にこのようなすばらしい人がいたことは私たちに誇りであり、それをさらにみがいていくことが大切だと思います。また、私も人につくす豊かな心の持ち主になりたいし、そのために努力をしなければいけないな、と思いました。

歴史は、私たちが忘れかけていたことをもう一度考え直させてくれるもので、これからも、このような色々な人々の生き方や考え方にふれて、歴史に学んでいきたいと思いました。